

Z119b 天変記録の現代天文学での重要性を知る「京都千年天文学街道ツアー」

○青木成一郎（京都情報大学院大学/京都大学）、作花一志（京都情報大学院大学）、小山勝二、柴田一成、野上大作（京都大学）、坂田肇、辻井輝幸、梅本万視、有賀雅夫、蒔田誠（花山星空ネットワーク）

陰陽師らが政治上の目的から観測して残した天変の記録の現代天文学研究における重要性を、京都の関連史跡へ案内しながら知ってもらう一般の方向けの教育普及活動として、「京都千年天文学街道ツアー」を認定 NPO 法人花山星空ネットワーク主催で 2011 年より継続して実施している。小山勝二氏の発案者に基づく活動であり、同氏が藤原定家の日記「明月記」に記された、1006 年の超新星爆発と同定された客星記録から 1000 年後の 2006 年に X 線天文衛星あすかで観測したことに端を発する。天文学の研究分野は、他の多くの自然科学研究分野とは異なり、対象となる現象である天体现象を再現する実験はできず、過去の記録が重要となる。例えば、超新星残がいはい時間を遡れば 1 点に集まることから爆発が原因と想像されるが、爆発したことを裏付けるのが「明月記」や中国の宋志「天文志」などに記された客星の記録である。特に、かに星雲は 1054 年に現れた客星と文献で同定されたことで、関連分野の研究者にとって有名である。「明月記」には超新星爆発と同定された客星記録のほか、藤原定家が京都で見たオーロラとされる赤気の記録もあり、当時の太陽活動を知ることができる点でも重視される。このような文献の記録の現代天文学研究における重要性を特に強調して、ツアーでは参加者へ説明している。本発表では、この活動で、特にこのような記録と現代天文学の関連をどのように参加者へ説明しているかを紹介する。ツアー参加者は、歴史や陰陽師に興味をもって参加した方も多く、天文学へ興味をもってもらうきっかけを広く提供する活動ともなっている。